



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヒルファディングの「組織された資本主義」論（1）
Author(s)	上条, 勇
Citation	北海道大學 經濟學研究, 27(2), 127-152
Issue Date	1977-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31386
Type	departmental bulletin paper
File Information	27(2)_P127-152.pdf



ヒルファディングの「組織された資本主義」論 (1)

上 条 勇

序 「組織された資本主義」論の形成過程

^{*}
私は前稿において第一次大戦中のヒルファディングの諸論稿をとりあげ、戦争を契機にして彼が「組織された資本主義」の現実的可能性を唱えるにいたったゆえんを明らかにしておいた。本稿では、それにつづいて、相対的安定期の一資本主義発達史観ともいうべきヒルファディングの「組織された資本主義」論を検討することにした。

* 拙稿「第一次大戦とヒルファディングの帝国主義論」(北大経済学研究26(3)1976, 8)

1. 1924年4月、ドイツ社会民主党(以下SPD)は、それまでの党理論誌『ノイエ・ツァイト』(Die Neue Zeit)にかえて、『ゲゼルシャフト』(Die Gesellschaft)を創刊した。この『ゲゼルシャフト』は、「マルクス主義の新局面」に対応した国際理論誌としての期待を担うものであった(カウツキー¹⁾の創刊の辞)。その編集長に就任したのがヒルファディングである。彼は事実上カウツキーの後継者として、戦後に再建された第二インターを代表する理論的指導者のひとりと目された。実際に彼は、資本主義のいわゆる相対的安定期におけるほとんどの党大会に主要報告者として登壇し、カウツキーとともにSPDのハイデルベルク綱領(1925年)²⁾を起草した。キール農業綱領(1927年)³⁾の草案作成にさいしては、農業委員会の議長となった。そして彼が当時の報告や論稿で唱えた「組織された資本主義」論は、コミンテルンのいわゆる「危機」論にたいするものとして、第二インターの公式的な理論と

なったのである。

ところでヒルファディングの「組織された資本主義」論は、いうまでもなく相対的安定期に突然唱えられたものではなく、彼の主著たる『金融資本論』(1910年)において——「組織された資本主義」という表現こそ使用されていないが——すでに萌芽的に論述されていた。そしてその後、戦争・革命の体験をとおして徐々に形成されたものであった。ここでは、ひとつの準備的考察として、ヒルファディングの「組織された資本主義」論のこの形成過程を簡単にのべておく。まず、問題の所在を明らかにする意味で、完全独占にかんするマルクスとエンゲルスの言及に触れておこう。

周知のようにマルクスは『資本論』において、資本の集積・集中が生産手段の集中と労働の社会化を進展させ、「資本独占」をもたらすという「資本家的蓄積の歴史的傾向」を描いた。⁴⁾そして資本集中の極限として、全社会的総資本の単一資本家あるいは単一資本家会社への集中を想定した。⁵⁾しかしこれはあくまでも理論上の仮定であり、マルクス自身は、完全独占が資本の自己否定を意味し、したがって現実には実現されぬものと考えていた。かかる完全独占への傾向にたいしては、つねに「分散的作用」が働く。⁶⁾独占は競争という環境のなかでのみ存在する。⁷⁾しかし彼のプランでは「分散的作用」等は諸資本の競争の篇で展開されることになっており、その篇が実際に書かれなかった以上、われわれはその具体的内容について知ることができない。

マルクスなきあとエンゲルスは、19世紀末の巨大な資本集中の諸現象をとらえて、いくつかの重要な指摘をおこなっている。彼は、マルクスが仮定としてのべた完全独占への前進傾向が、一産業部門レベルではすでにイギリスやアメリカにおいて現実にもみられると確認した。⁸⁾また、個人企業→株式会社→トラスト→産業部門全体の株式会社による独占→国有化といった、星野中氏によれば『「社会化」進展の図式』を示した。¹⁰⁾そしていくつかの生産部門にトラストが成立すると、私的生産も生産の無計画性も消滅するとのべたのである。¹¹⁾結局、エンゲルスは、19世紀末の資本主義分析から、マルクスが仮定した完全独占への傾向の着実な前進を確認した。

さてわれわれはマルクス・エンゲルスから発して、問題がつぎのような形で彼らの後継者たちに残されたということができる。すなわち、資本の集積・集中と生産の社会化は、どこまで進み、いかなる資本の形態に導くのか、またそのさい競争と生産の無政府性はいったいどうなるのか？と。われわれの関心に引きつけていえば、この問題が、一方に資本集中→完全独占への傾向の一面の強調から「組織された資本主義」の形成といった解答を見いだしてゆくのである。

その後、資本集中と独占の問題は、修正主義が論争をへて、ヒルファディングの『金融資本論』においてはじめて正面にすえられた。その序文はつぎのようにのべている。

「『近代』資本主義の特性をなす集積過程は、一方ではカルテルやトラストの形成による『自由競争の止揚』となってあらわれ、他方では銀行資本と産業資本とのますます緊密化する関連となってあらわれる。」⁽¹²⁾

資本はこの関連をととして金融資本の形態をとするというわけだが、ところでヒルファディングは、独占と金融資本をどのような観点から取りあげたのだろうか。

結論を先取りしていえば、ヒルファディングは、銀行による産業の支配と創業利得の取得を主題とする一方、「社会経済の組織化の問題」を解決し、社会主義の物質的前段階を準備するものとして、独占と金融資本を明らかにした。そしてこういった観点から、彼は完全独占論にびったり接近するのである。この点、もう少したちいって検討しよう。

- * これまでの『金融資本論』の諸研究において、ヒルファディングの流通主義的方法、貨幣論、総カルテル論、中央銀行論、金融資本規定、恐慌論のなかにすでに「組織された資本主義」論の萌芽が含まれていることが指摘されているが、以下ではなかでも一番核心的な独占と金融資本概念に言及するにとどめる。⁽¹³⁾

『金融資本論』において、独占形成は利潤率の均等化の法則とのかかわりで、理論化されている。そのさい注目すべきことにヒルファディングは、独占による投機の死とか競争の止揚傾向を面的に強調している。のみならず⁽¹⁴⁾

「カルテル化には絶対的な限界はない」として、カルテルが他の産業に波及してゆく過程が究極的に「総カルテル」の形成にみちびくと考え、かかる「総カルテル」が支配する資本主義段階をさえ観念しているのである。¹⁵⁾

とはいえ彼はこの「総カルテル」について、ベルンシュタインらのカルテル・トラストによる恐慌の解消論を批判するにあたり、つぎのようにその現実性を否定してもいる。すなわち、生産の無政府性はなしくずし的にはなく総カルテルの成立によってはじめて止揚されるが、このような状態は、経済的には考えられるにしろ、社会的および政治的には一個の不可能事である、¹⁶⁾と。だが、ヒルファディングのこういった見解は、前述のごとくマルクスが諸資本の競争の篇で完全独占の成立を否定する意図をもっていたのにたいし、完全独占不成立の経済学的説明を放棄することにほかならない。というよりも彼の独占論の性格から考えて、それを経済学的には説明できなかったといった方がいい。なぜならヒルファディングは、独占による競争の止揚傾向を一面的に強調しているのであり、基幹産業を中心として独占が成立した意味、さらに独占と競争の対立・矛盾・軋轢関係についてほとんど注意を払わなかった。その結果、彼は、独占形成による資本主義の組織化と計画化がどんなに矛盾にみちたものであるかを明らかにしえなかったからである。結局、私は客観的にみて、ヒルファディングの上述の見解が、「資本主義の組織化」視角からの彼の独占論と修正主義批判を意図した彼の恐慌論とのあいだに生じたひとつの論理矛盾を表現しているように思われる。とくに彼の恐慌論におけるつぎのような事実を考えれば、そういえる。すなわち「金融資本と恐慌」というその表題にもかかわらず、第4篇では、両者の関係についてほとんど触れるところがないという矛盾である。恐慌の性格における変化をあつかった第20章でも、(1)信用・銀行制度の発展による信用恐慌・銀行恐慌等の発生 の困難化（産業にたいする銀行の支配の影響もこの関連でごくわずかに触れられる）と(2)カルテルによる非カルテル産業への恐慌負担の転嫁についてのべられているにすぎない。この事実は、ヒルファディングが明らかにした金融資本の、以下にのべる性格と密接に関係していると考えられる。

周知のように、ヒルファディングは金融資本を「銀行の管理下において産業によって充用される資本」「貨幣形態の資本」と定義した。つまりヒルファディングにあっては、金融資本は、社会に存在する遊休貨幣の処分権を掌中にした銀行が、その資本を擬制資本形態でいつでも流動化する可能性をもたせつつ、産業に投下し、その投下資本が固定化される関係を意味している。¹⁷⁾レーニンは正当にもこの定義にたいして独占の欠落を批判した。¹⁸⁾しかしながらレーニンはここでヒルファディングの金融資本概念が資本主義の組織化の観点からのべられていることに十分の関心を払っていないように思われる。

つまりヒルファディングによれば、金融資本においては、産業・商業・銀行資本のいっさいの部分的資本諸形態は、貨幣資本（貸付資本と擬制資本）の運動をとおして、全体性に統一されてあらわれる。すなわち金融資本は、産業・商業・銀行資本を三位一体的に組織的に統一するまでにいたった「貨幣資本」の最高形態であり、この意味で銀行資本を揚棄したものである。

かかる金融資本は、歴史的につぎのごとく「社会経済の組織化の問題」を解決する。つまり金融資本は、株式会社制度を基礎とし、産業における集積と銀行における集積の前進につれて発展する。それは、一方における「総カルテル」の形成、他方における『中央銀行』の形成によって進められる資本主義の組織化を、さらに両傾向の基盤にたちそれらを統一することによって歴史的に促進する。そして「金融資本の完成形態」は資本主義の組織化の完成を意味する。「金融資本はその完成形態においては、資本少数政治の手における経済的政治的絶対権の最高段階を意味する。」また、その場合、すでに敵対の形態で意識的に調整される社会が成立しており、金融資本は、「その発生した培養土からひきはなされている」。¹⁹⁾かかる金融資本は、その傾向からいえば、「生産にたいする社会的管理の樹立」「敵対の形態における社会化」を意味しており、社会主義の物質的基盤をなしている。

以上、はなはだ大ざっぱな検討であるが、その結論として、ヒルファディングの金融資本概念こそ、「組織された資本主義」の理論的基盤をなしているといえる。そしてかかる金融資本は、いうまでもなくヒルファデ

ィングによる恐慌解消論批判と矛盾する。しかしこの矛盾は、『金融資本論』のなかでは、比較的めだたない形で存在していたのであり、ヒルファディングは、「組織された資本主義」が理論的抽象的な想定にすぎず、現実化しえないものだとすることによって、それを処理することができた。彼は「組織された資本主義」段階にいたるまえに、金融資本の政策たる帝国主義がもたらす物価騰貴、租税負担、戦争等の諸矛盾からプロレタリアートのディクター²⁰⁾ツッラーが樹立されるとみていた。その点、レーニンによるカウツキーの超帝国主義、超独占にたいする批判と一見類似する視点をもっていたといえる。²¹⁾しかし客観的には、彼の『金融資本論』は、完全独占、「組織された資本主義」の現実性にすでに引きよせられる理論構造をもっていたのである。

- 1) K. Kautsky, Phasen und Zeitschriften des Marxismus, in : Die Gesellschaft, 1. Jg. Bd. 1, 1924, S. 26.
- 2) W. Gottschalch, *Struktur Veränderung der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*. 1962, S. 26. ゴットシャルヒ『ヒルファディング — 帝国主義とドイツ・マルクス主義 —』保住敏彦・西尾共子訳, ミネルヴァ書房, 1973. 17ページ。
- 3) 社会経済研究所『農業政策綱領』政策綱領大系1, 春秋社版, 1929, 236ページ。
- 4) マルクス『資本論』国民文庫版(3)437~438ページ。
- 5) 同上, 212ページ。
- 6) マルクス『剰余価値学説史』マルエン全集26Ⅲ, 大月書店, 406ページ。
- 7) マルクス『哲学の貧困』国民文庫版, 204ページ。
- 8) マルクス(註6)
- 9) マルクス(註5) エンゲルスの註。
- 10) エンゲルス『空想より科学へ』岩波文庫版, 80~83ページ。星野中「帝国主義論史における『社会化』論的系譜(1)」(経済学雑誌, 72(2), 1972. 2) 7ページ。
- 11) エンゲルス「エルフルト綱領批判」(『ゴータ綱領批判・エルフルト綱領批判』国民文庫版) 90~91ページ。
- 12) ヒルファディング『金融資本論』国民文庫版(1)49ページ。
- 13) たとえば, 松井安信「ヒルファディングの『組織された資本主義』への布石」(『信用貨幣論研究』, 日本評論社, 1970, 第3章の三)・野田弘英「金融資本論の研究(1) — 『総カルテル』論の特質 —」(九大経済学研究34(4)1968. 10)・本間要一郎「ヒルファディングの『独占』理論」(『競争と独占』, 新評論, 1974, 補論2)・元田厚生「ヒルファディングにおける『金融資本』の理論構成について」(研究

年報・経済学33, 1971) 星野中「ヒルファディング『金融資本論』の基本的構造とその問題点—研究史上の位置との関連において—」(『資本主義の思想構造』内田義彦・小林昇編, 岩波書店, 1968所収)・長岡豊「ヒルファディングの不批判説と『組織された資本主義論』」(六甲台論集3(4)1956, 12) その他コミンテルンによる社会ファシスト的恐慌論批判。

- 14) ヒルファディング『金融資本論』第3篇第11～13章参照。
- 15) 同上(2)104～105ページ。
- 16) 同上(2)205ページ。なお、われわれは、カウツキーの1892年の著書『エルフルト綱領解説』(都留大治郎訳, 世界大思想全集14, 河出書房, 1955, 63ページ)のなかにも、これと同様の表現を見いだすことができる。
- 17) ヒルファディング『金融資本論』(2)88～89ページ。
- 18) レーニン『帝国主義論』国民文庫版, 60～61ページ。
- 19) ヒルファディング『金融資本論』(2)105～106ページ, 81ページ, 336～337ページ, 341ページ。
- 20) 同上, 第5篇第25章。
- 21) レーニン(註18) 122～123ページ。

2. 『金融資本論』において、ヒルファディングは、前述のように帝国主義を社会主義の前段階とみなし、帝国主義にたいして自由貿易ではなく社会主義を、プロレタリアートの政策として対置した。²²⁾そして第一次大戦前夜には、社会民主党内中央派の立場からではあるが、当時の国際情勢を、イギリス帝国主義とドイツ帝国主義の対立を基軸にする観点から分析し、近い将来における社会革命の到来を展望した。²³⁾だが、戦争はヒルファディングの予期せざる事態をもたらした。すなわちそれはSPDの戦争協力と国際社会主義運動の分裂にみちびく一方、国家権力の異常な強化と戦時統制経済における資本主義のいちじるしい組織化と計画化をもたらしたのである。このような事態に直面してヒルファディングは、これまで抽象的に想定していた「組織された資本主義」を、現実的可能性において考えるようになったといえる。これについては前稿ですでにのべているので以下、略述にとどめる。彼は、戦時中のいくつかの論文のなかで、「組織された資本主義」に言及している。同じ時期に、戦時統制経済の観察から、レーニンやブハーリンらが国家独占資本主義論あるいは国家資本主義論を唱えたが、ヒルファディングも国家を

重視する観点から「組織された資本主義」を明らかにし、「組織された国家資本主義」という用語をそれとほとんど同義に使用した。そして戦後における社会発展の道を、「組織された資本主義か社会主義か」といった二者択一の形で展望したのである。

一方、「組織された資本主義」にかんする見解のこの変化に対応して、帝国主義にたいするヒルファディングの見解にも若干の変化がみられた。彼は、分裂状態におちいった当時の国際社会主義運動の状況をみて、帝国主義に直接的に社会主義を対置することはあまり効果がないと考えた。それよりもむしろインターナショナルの再建が急務であるとみなし、具体的諸要求の積み重ねをとおして、国際労働者階級を統一にみちびこうとした。この具体的要求のひとつとして、彼は、(1)帝国主義戦争の協力者と一線を画すプロレタリアート独自の商業政策(2)労働者の物質生活の切実な要求だという理由から、自由貿易政策を掲げた。そしてこの自由貿易政策の延長線上に——「組織された資本主義」の一環として——超帝国主義の可能性を認めたのである。かくてわれわれは、第一次大戦中にヒルファディングが結局帝国主義か自由貿易主義かといった問題を一方ではたて、他方では「組織された資本主義」(超帝国主義)か社会主義かという戦後における発展の二つの道を示したとい²⁴⁾うことができる。

1918年11月、ドイツ革命が勃発した。ヒルファディングは、上述の「組織された資本主義」か社会主義かといった二者択一の判定が社会主義の方にくだされたと考えた。彼は、戦地から復員早々ドイツ独立社会民主党(USPD)の新機関紙『フライハイ特』(Die Freiheit)の編集長となり、USPDの代表的理論家のひとりとして、ドイツ社会化(Sozialisierung)運動を積極的に指導していった。彼は革命の当初、資本家階級の経済的権力を奪い、「社会主義政権」²⁵⁾の権力基盤を強化するために基幹産業の「社会化」²⁶⁾の実施を唱えた。また「社会化」が戦後経済再建の最良の道であると主張した。²⁷⁾

しかし革命における労働者階級の敗北は、ヒルファディングをしてふたたびかの二者択一を思いださせる。1920年10月の演説「社会化と諸階級の力関

係」において、ヒルファディングは、ふたたび社会主義が「組織された資本主義」かといった二者択一を提示するにいたった。²⁸⁾しかし彼は与党的立場から社会化運動にかかわり、社会主義への過渡期の複雑さをあらためて認識した結果、この時点ではすでに「組織された資本主義」の到来を予期しはじめたのではあるまいか。上述の演説で彼は、革命の挫折の原因——これは「社会化」の性格と関連しているが、これについては「経済民主主義」の検討のさいに触れる——を労働者階級の未熟等にもとめ、社会主義の実現が日常的改良闘争をととして労働者を教化する息の長い過程であるとのべた。²⁹⁾そのとき彼は、すでに社会主義への過渡的段階として「組織された資本主義」を意識していたように思われる。

それいらい、経済の混乱と資本家の攻勢によって労働者階級が守勢にたたされた情勢下で、ヒルファディングは、労働者の生活改善のために、もはや「社会化」の道か資本主義の道かにこだわることなく、戦後経済の再建に尽力しはじめる。彼はコミュニストの崩壊論＝攻勢戦術と重工業を中心とした反動グループの好戦的政策——彼によれば左右両翼の「破局政策」——に反対した。そして戦後恐慌をひとつの循環恐慌だ——特殊な性格を有するが——と説明することによって、戦後資本主義の景気浮揚の可能性を確認した。³⁰⁾1921年2月、ウィーンで開催された国際社会党協議会（第二半インターの創立大会）の席上では、この再建にあたって大きな障害となっている賠償問題の節度ある解決を訴えている。³¹⁾国際情勢については、当時の国際会議（ワシントン会議、ジェノワ会議）にかんする論説のなかで、アメリカをバックとするイギリスとフランスの対立に、あたらしい世界戦争の危機の火床があることを一方では認めつつ、イギリスを中心とした「再建のための全ヨーロッパ連合」の形成に世界平和の確立を期待した。³²⁾

1923年8月、ヒルファディングはシュトレゼマン内閣のもとでの蔵相として、失脚するまでのわずかな期間ではあるが、インフレーション収束のための通貨改革にのりだした。³³⁾ドーズ案が提示されたとき、彼はドイツ政府にドーズ案の受けいれを要求した。³⁴⁾かくてヒルファディングは、相対的安定期

——彼によれば「組織され資本主義」の時代——を、みずからその成立に積極的な役割をはたしつつむかえたのであった。

以上、われわれは『金融資本論』から戦後経済再建期にかけて、ヒルファディングの「組織された資本主義」論の形成過程を大まかにたどってみた。

『金融資本論』以後の時期におけるヒルファディングの活動なり見解なりは、それじたいとして多くの興味深い論点を含んでいるのだが、以上では「組織された資本主義」に関係する事実をなぞるにとどめなければならなかった。しかしそこでのごく大ざっぱな考察からも、『金融資本論』と「組織された資本主義」論が決して理論的に断絶したものではないことがうかがいえたであろう。つまり「組織された資本主義」論は、決して『金融資本論』の論理の全面的改訂のうえに成立したのではなく、むしろこの論理の延長線上に、情勢変化に対応して唱えられたと考えることができる。その形成過程は——以上の考察を約言すれば——「組織された資本主義」の抽象的可能性が現実性に転化してゆく過程であった。この過程が、結局、相対的安定期の資本主義の観察から、「組織された資本主義」論の成立にみちびいたといえよう。これについてのたちいった考察を、以下、本論でおこなうことにしたい。

- 22) ヒルファディング『金融資本論』(2)335ページ。
- 23) 1910年から1912年にかけての、オーストリア社会民主党理論誌“Kampf”とSPD理論誌“Neue Zeit”におけるヒルファディングの諸論稿を参照。なお第一次大戦前夜のヒルファディングについては、別稿を用意している。
- 24) 拙稿(前掲)のとくに N. 超帝国主義論の萌芽 V. 戦時経済と組織された資本主義を参照。
- 25) W. Gottschalch, (Anm. 2) S. 18~19. 邦訳, 8~9 ページ。なお、ヒルファディングの「社会化」論にかんするわが国の研究には、米川紀生「Rudolf Hilferding の社会化論——R. Hilferding 研究(1)」(一橋論叢64(1)1970. 7, 新潟大学経済論集(9)1971. 2, (11)1972. 1), 黒滝正昭「ヒルファディングの社会化論(上・下)」(研究年報経済学35(4), 36(1)1974)がある。
- 26) R. Hilferding, Revolutionäre Vertrauen?, in: Die Freiheit, Jg. 1, Nr. 6, 18. 11. 1918.
- 27) R. Hilferding, Zur Sozialisierung Frage, Sonderabdruck aus dem Protokoll der Verhandlungen des Zehnten Deutschen Gewerkschaftskongresses, abgehalten

- in der Zeit Vom 30Juni zu 5 Juli Nürnberg, (Berlin. 1919) S. 38.
- 28) R. Hilferding, Die Sozialisierung und die Machtverhältnisse der Klassen (Referat auf dem 1. Betriebsrätekongreß, gehalten am 5. Okt. 1920) Berlin, S. 8. 二者択一は、Selbstverwaltung in der Industrie, in: Der Sozialist, 7. Jg, 1921, S. 1040. において繰り返される。
- 29) R. Hilferding (Anm. 28) S. 23~25.
- 30) R. Hilferding, Die Einigung der deutschen Arbeiterklasse, in: Der Kampf, 14. Jg., 1921.
- 31) R. Hilferding, Die Wiedergutmachung und das international Proletariat, in: Der Sozialist, 7. Jg., 1921.
- 32) R. Hilferding, Die Weltpolitik, das Reparationsproblem und die Konferenz von Genua, Schmollers Jb. f. Gesetzgebung, Verwaltung. u. Volkswirtschaft im Deutschen Reich, 46. Jg., 1922.
- 33) W. Gottschalch, (Anm. 2) S. 20~23. 邦訳, 10~13ページ。
- 34) R. Hilferding, Die Reichstagswahlen und die Sozialdemokratie (Rede auf dem Berliner Parteitag der SPD 1924) Protokoll, S. 169~170.

I 「組織された資本主義」論の理論構造

レーニンは、彼の『帝国主義論』において、帝国主義がプロレタリアートの社会革命の前夜であると規定したが、³⁵⁾第一次大戦後期はまさしくだれの目にもプロレタリアートの社会革命の時代だと映った。多くの社会主義理論家は、当時の国際情勢を帝国主義論の論理の帰結として把握したのであり、資本主義の崩壊現象から直接的に社会革命運動の指針を引き出すことができた。

しかし、1920年代中ごろになると、危機からの脱出が不可能のようにみえた資本主義が、あらたに回復・上昇の時期をむかえた。資本主義のこの情勢変化にたいして、社会主義者たちはあたらしい対応をせまられた。コミンテルンは、資本主義の「部分的、一時的安定」「相対的安定」「民主主義的平和主義」の時代の到来を宣言した。そして理論上の模索をはじめたが、資本主義の発展の時期がもはや過ぎさり、その没落期がはじまったと考え、安定を別な形態をとった危機とみなす点では共通していた。その後コミンテルンは、個々の論者のあいだに多少の見解の相違を残しつつも、体制間矛盾と不均等発展の法則を柱とする全般的危機論を確立してゆく。³⁶⁾

このように、コミンテルンの理論が、第一次大戦後の資本主義にもはや発展の内的動力が失われたとみなす傾向があったとすれば、他方ではそれと正反対の、かなり影響力をもった見解が生みだされた。第二インターの「組織された資本主義」論がそれである。そしてその代表をなすものが、ヒルファディングの「組織された資本主義」論であった。

序でのべたように、ヒルファディングの「組織された資本主義」論は、『金融資本論』と断絶したものではなく、その論理の発展のうえにうちたてられた資本主義の一時代観である。ヒルファディングは、『金融資本論』で「組織された資本主義」の抽象的観念をあたえたが、そのような時代がおとずれるとはまったく思いもよらなかった。むしろそういった規定を、修正主義の恐慌解消論にあい通ずるものだという理由から否定していた。しかし戦争・革命の体験をとおして「組織された資本主義」の現実性を意識し、戦後資本主義が安定局面にはいるや、「組織された資本主義」の時代が到来したと考えるにいたったのである。

こういった事態に直面して、彼の友人カール・レンナーは、「組織された資本主義」の時代に対応し、マルクス主義を「修正」すべきだとする「生きたマルクス主義」(lebendige Marxismus) 論を唱えたが、ヒルファディングも基本的にレンナーと同様の立場にたっていた。彼は、結局、この時点ではベルンシュタイン修正主義の軍門にくだったのである。つまり生産の無政府性の止揚と経済の計画化という観点から相対的安定期の資本主義をとらえたのであり、資本主義のかかる変化に対応して改良主義的な「経済民主主義」論を、社会主義運動の指針としてたてた。国際問題については、労働者階級の平和政策を追求する観点から、超帝国主義——彼によれば「現実的平和主義」——を主張した。私が本稿でヒルファディングの「組織された資本主義」論という場合には、広義においてこの三つ(①組織された資本主義②経済民主主義③現実的平和主義)を内容とした一時代観をさしている。まず本節では、「組織された資本主義」論を唱えたので有名な1924年の論文「時代の諸問題」³⁸⁾と1927年のSPDキール大会での演説それに1925年のハイデルベルク大

⁴⁰⁾
会での綱領演説などを中心に、ヒルファディングの「組織された資本主義」論の理論構造を明確にする角度から、上述の第一の部分を検討する。

- 35) レーニン (註18) 17ページ。
- 36) これについては、森果『『相対的安定期』の分析視角(その1) コミンテルンの世界経済論(2)』(北大経済学研究24(2)1974. 7)を参照。
- 37) Karl Renner, Auf dem Weg zur grossen Erneuerung, in : Die Gesellschaft, 5. Jg. Bd. 2, 1928. S. 292~293. 「生きたマルクス主義」については、Kurt Langer, Sozialdemokratische Wirtschaftstheorien der Nachkriegszeit, Basel, 1937, S. 16~18.
- 38) R. Hilferding, Probleme der Zeit, in : Die Gesellschaft, 1. Jg. Bd. 1, 1924. 最近この邦訳, 「ヒルファディング — 現代の諸問題(上・下) — 」(国家独占資本主義研究会訳, 経済科学通信10, 1976. 9, (1976. 12) がだされたが、筆者はまだ目にする機会をえていない。
- 39) R. Hilferding, Die Aufgaben der Sozialdemokratie in der Republik (Rede auf dem Parteitag der SPD zu Kiel. in : Protokoll……) 1927.
- 40) R. Hilferding, Programmrede auf dem Heidelberger Parteitag. (in : Protokoll……) 1925.

1. レンテマルクの奇跡によって戦後インフレーションが収束された年の1924年4月、ヒルファディングは、『ゲゼルシャフト』創刊号の巻頭論文「時代の諸問題」において、ドーズ案採用前のまだ不安定の要因を残したドイツ資本主義の観察から「組織された資本主義」への発展の方向性を読みとった。そしてそれについてつぎのようにのべている。

「経済学において戦争と戦後の時期は、資本の集中傾向(Konzentrationstendenzen) のとほうもない増大を意味する。カルテルとトラストの発展は強力に促進される。自由競争の時代は終りに近づいている。諸大独占は経済の決定的支配者となり、社会的資本を集中し経済に用だてる銀行とますます緊密に結合するようになる。産業・商業・銀行資本のかつての分離形態は金融資本の形態において統一にむかう。これは自由競争の資本主義から組織された資本主義への移行を意味する。大経営における労働過程の社会化は産業部門全体の労働過程の社会化に、そして社会化された産業部門相互の連合に進展する。かくて経済の意識的調整と指導が生まれ、それは自由競争の資本主義に固有の無政府性を資本主義的基盤のうでで克服する傾向をもつ。この傾向が障害なくつらぬくとすれば、その結果と

してひとつの組織されているが、敵対的形態において階層的に (hierarchisch) 組織された経済が生ずるであろう。

それは生産手段を所有している諸層のための、社会的生産の調整と組織化のこのころみである。この諸層は生産の指導と社会的生産物の分配にたいして決定的な影響力をもつであろう。資本主義的生産諸関係の不安定性は軽減され、恐慌あるいは少くとも労働者へのその反作用は緩和される。大トラストによる新投資の計画的配分、好景気の時期における固定資本の新投資の抑制、その不況期への延期、中央銀行の適切な貨幣政策に⁴¹⁾支えられた大銀行のそれに応じた信用調整はそのような政策の手段をなすであろう。」

以上の引用からわかるように、ヒルファディングは、『金融資本論』に内在していた「組織化」の論理を前面に押し出し、資本集中からときおこして金融資本による資本主義の組織的統一化の筋道を明らかにしている。そして、社会化された諸労働過程がカルテルと金融資本によって社会的全体的に統合されると単純に想定し、経済の意識的調整と生産の無政府性の止揚傾向を指摘している。彼は結局、恐慌、失業、貧困を緩和ないし解消し、分配の敵対関係のみを矛盾として残すような資本主義段階を、「組織された資本主義」として観念しているのである。

ヒルファディングのこういった見解は、——序でのべたごとく「金融資本形態に統合」というところに彼の思考の特性があるのだが——つぎのような現実認識にもとづいている。第一に、戦時統制経済と戦後インフレーション期の巨大コンツェルン（たとえばシュティンネス）の成立がもたらしたとほうもない資本の集中であり、ヒルファディングは資本の集中の力強い前進に戦後性をみたのである。第二に、インフレーションの収束をもたらしたライヒスバンクを頂点とする銀行の信用調整力であり、彼はその景気政策に恐慌の解消を期待した。これに関連していえば、彼は、同じ原則的観点からではないがとことわりつつ、J・M・ケインズらの研究に注目している⁴²⁾（オットー・パウアーも1925年の演説でケインズの見解にふれている⁴³⁾）。第三に、戦争の結果として、生産手段産業に偏ってだが、資本主義が生産能力をかなり拡大したという認識である。彼は、戦後危機さえ克服すれば、この拡大した生産能力があらたな生産上昇と好景気の基盤になるとみていた。

以上の事実認識から、ヒルファディングは、「この傾向が障害なくつらぬくとすれば」という但し書きを付与しつつ、「組織された資本主義」への発展傾向を展望した。それは確かに多少将来を先取りした発言である。というのは、ヒルファディングじしん、2ヵ月後のSPDベルリン党大会での演説において、経済状態の不安定さと恐慌への危険性をみとめ、打開策としてドーズ案の採用を訴えねばならなかったからである。⁴⁴⁾ ヒルファディングがここで「組織された資本主義」を先取的にのべたのは、『金融資本論』いらいの彼独自の「組織化の論理」によりつつ、資本主義の安定 (Stabilisierung) に即応した社会主義運動の理論指針を打ちださんがためである。論文「時代の諸問題」は、『ゲゼルシャフト』創刊号の巻頭を飾るのにふさわしく、「組織された資本主義」への一般的展望を示し、その観点から相対的安定期の資本主義の諸問題——社会主義への過渡期的性格 (経済民主々義)、農業問題、西欧における民主主義の発展とあたらしい政治的可能性、国際情勢 (超帝国主義の可能性) 等々——の要点をまとめて、社会民主々義者たちに理論研究の指針をあたえた綱領的文書であった。実際に、この論文でのヒルファディングの見解は大部分SPDの新綱領にその基底をなすものとしてつらぬかれた。1925年のハイデルベルク大会での綱領演説において、ヒルファディングは「組織された資本主義」の見地になって、採択にふされたSPDの新綱領草案の要点を解説しており、またドイツ革命期の社会化運動の総括から経済民主々義運動の方向性を示した。この演説で、彼は「組織された資本主義」の成立を、歴史的段階をおってつぎのように説明している。

第一段階、小経営にたいする大経営の技術的経済的優越性が勝利し、小経営は撃退され、その社会的意義を喪失する。

第二段階、固定資本の巨大化が恐慌時における経営間の競争負担の増加をもたらし、結局競争の排除をめざした独占的組織への連合の動きを呼びおこす。これは利潤率の調整関係から各産業につぎつぎと波及する。かくて資本の組織化傾向が資本主義的生産部門の無政府性に織りこまれ、階層的に組織され資本主義が生ずる。しかしそれによって自由競争と無政府性を終焉させ

る資本主義の集中過程が汲みつくされるのではない。

第三段階は、私的経営の株式会社への移行をもって始まる。これを基礎として産業資本と社会の信用組織（銀行）の結合が完成する。これは結局、金融資本による産業・銀行・商業資本の統一を生みだす。「金融資本はそれじしん資本主義的集中傾向の諸作用から生まれて、このように資本主義的集中傾向を完遂し、そして資本主義的階級社会の枠内で可能な最高の仕上げにおいて、経済の階層的敵対的な組織を形成する。⁴⁶⁾」

このようにヒルファディングは、「組織された資本主義」の形成過程を三段階にわけて歴史的側面からのべている。これは、上述の「時代の諸問題」における見解を、『金融資本論』の「組織された資本主義」に結びつく部分を整理する形で補強したものだとして受けとることができよう。注目すべきことに、ここでは、彼は金融資本概念を、資本主義の組織化の完成者として明確に位置づけている。のちの論文では、それを「組織された資本主義において支配的な資本形態」⁴⁶⁾とさ^{*}えのべている。

* ところで金融資本にかんするヒルファディングのこういった見解にたいして、相対的安定期には企業の自己金融化と銀行の地位の低下という現象が生じた。彼はこれにどのように対処したのだろうか。それについて彼はつぎのようにのべている。

「そのさい銀行が産業を絶対的に支配しているか、ないしは産業資本が絶対的従属性のもとにあるかどうかと考えるのは俗人的であろう。ここでは根本的に対立する利害が重要なのではなく、大部分同一的であるか平行的な利害が重要な⁴⁷⁾のである。」

つまり、組織化の観点にたつヒルファディングは、金融資本における産業と銀行の支配従属関係ということはもはや決定的ではないという形で、問題を処理したのである。

資本主義の組織化にかんするヒルファディングの見解は、彼の報告に続いておこなわれた代議員の発言において、ほとんど異議を唱えられなかった。そしてSPDの新綱領のなかにつぎのように組みこまれた。

「資本家の独占欲は、諸産業部門の総括へ、継起的生産段階の結合へ、そして

カルテルとトラストにおける経済の組織化へと至る。この過程は、産業資本・商業資本そして銀行資本を金融資本へと結合する。⁴⁸⁾」

結局、ヒルファディングの「組織された資本主義」論は、ハイデルベルク党大会で、SPDの公式的見解として採用されたわけである。

さて、私は、「時代の諸問題」におけるヒルファディングの「組織された資本主義」が戦後インフレによって生じた巨大コンツェルンによる資本の集中を事実認識の基礎のひとつにしているとさききのべた。ところがこの巨大コンツェルンは、シュティンネスの破産に代表されるように、通貨の安定期にはその非合理的組織なる面を暴露した。しかしヒルファディングは、戦後インフレの収束とともに資本の集中過程も途絶するのではないとのべ、それにかわる資本集中の動きをつぎのように指摘する。

ラインランドのコンツェルンは、旧カルテル組織がもはや経済的に非合理的になったことを認識し、合理的に生産をおこない、動力の最少の費用で最大の生産性を達成するためにトラスト組織に移行する。今日広範に、⁴⁹⁾「ドイツ経済のカルテル組織からトラスト組織への移行がおこなわれている。」

つまりここでヒルファディングは、帝国主義のあたらしい局面に対応した独占体と金融資本の再編強化と蓄積運動、すなわち合同製鋼やIGファルベンなどの大トラストを生みだしたドイツ経済における合理化過程の動きを、「組織された資本主義」における経済の計画化の現実的基盤として指摘するのである。彼は、その後、アメリカ的生産様式の導入をも意味するこのドイツ合理化運動の成果をふまえ、1927年、SPDキール大会での演説において、「組織された資本主義」の到来を確言するにいたった。前述の「時代の諸問題」における種々の問題提起——とくに農業問題と「現実的平和主義」にかんする——が、ヒルファディングの他の諸論稿で豊富な理論の内容をえていく一方、1927年のこの有名な演説では、「組織された資本主義」の理解が比較的まとまった形で、以下のごとくのべられている。

「……われわれが現実といかなる状況にあるかを問うならば、たんに『後期資本主義』(W. ゾンバルト——引用者) という表現にとどまることができず、こ

の状況をまず非常に具体的に観察し、緻密に特徴づけなければならないだろう。そこで決定的なのは、われわれが現下のところ根本的には盲目的な市場法則の摂理によって純粹に支配される資本主義の自由競争の時代が過ぎ去り、経済の資本主義的組織化に、したがって諸力が自由に発現する経済から組織された経済にいたった資本主義の時期に住んでいるということである。」(傍点隔字体)

ヒルファディングは、このように「組織された資本主義」の時代の到来を確認し、つづけて相対的安定期の観察から、「組織された資本主義」の諸特徴をつぎのようにまとめている。

第一に、合成化学の発展と応用で、これは資本主義的生産の技術的総基盤を爆発的に変革する。

第二に、新技術の組織の利用で、新産業部門では資本はあらかじめ大規模に、場合によっては——人絹産業の例にあるように——世界的に組織される。それは「国際資本主義的コンツェル」への傾向をもつ。

第三に、資本主義的産業の国際化、すなわち国民的独占、カルテル・トラストが国際的に集中する傾向である。戦前、国民的に封鎖されていた資本は、今日、驚くべきほど国際的連関をもとめ、国際的組織化の道を追求している。

第四に、——もっとも重要な特徴だが——、企業と経済の管理がもはや私的ではなく社会的要件となっており、その結果国家の干渉が今日経済において重要な位置を占めている。⁵¹⁾

このようにヒルファディングは、「組織された資本主義」を4つの特徴にまとめて説明している。この説明は、ヒルファディングの「組織された資本主義」像をより明白にあらわすものであろう。すなわち「時代の諸問題」において金融資本による組織化といった形で多少抽象的に観念されていた彼の「組織された資本主義」は、この演説では、①新技術的生産力的基盤にたち、②国際的組織化にむかうほど資本が集中した、③国家によって管理された——国家資本主義的な——資本主義の時代として体系化されている。ヒルファディングがこうのべた当時ドイツ資本主義は、いわゆる「安定恐慌」を克服して、合理化景気といった活況局面にはいり、戦後たちなおった鉄鋼・化

学・電機独占資本も、力強い国際的展開を繰り広げていた。それはドイツ帝国主義の復活過程ともいうべきものであったが、ヒルファディングはかかる現実を「組織された資本主義」の時代の幕あけと理解した。こういった情況を反映して、キール大会におけるヒルファディングの「組織された資本主義」論は、つづいての代議員の発言においてほとんど共感をもってむかえられ、大会ではむしろきたるライヒ議会選挙をひかえ「連合政権政策」の賛否をめぐって議論が闘われたのである。

以上、われわれは、ヒルファディングがあたえた「組織された資本主義」の一般的な内容と特徴をみてきた。時代の諸問題で抽出された「組織された資本主義」は、相対的安定期の進行とともに一定の豊富化をへ、ついにはキール大会での演説においてその到来を確言された。そして、1928年の第二インターのブリュッセル大会を前後して、社会民主主義運動内に「組織された資本主義」論の開花期を招いた。^{*} この大会でも、「組織された資本主義」は論議の重要な部分を占め、その決議「戦後の経済状態と労働者階級の経済政策」は、「私的独占の組織された資本主義が自由競争の個人主義的資本主義に代替した生産部門数は増大しつつある」と宣言した。⁵²⁾ また同じ年にドイツ労働組合総同盟(ADGB)のハンブルク大会が開かれたが、この大会では、「組織された資本主義」の時代に対応した社会主義運動の指針が討議されたのである。⁵³⁾

ところで、「時代の諸問題」において、ヒルファディングは、相対的安定期の資本主義がかかえた個々の諸問題を提起した。彼はその後書いた諸論文でそれらに豊富な内容をあたえたのであるが、以上の検討では「組織された資本主義」の一般像を提示する理由からそれらを捨象してきた。われわれはつぎにその具体像を示すため、(1)農業問題(2)合理化(3)階級関係の変化(4)国家の経済介入の四点について、各論的に考察することにした。

* 「組織された資本主義」論は、多くのオーストロ・マルクス主義、ドイツ社会民主主義理論家によって、種々の観点から展開された。以下では、なかでも代表的なカール・レンナー、オットー・ライヒター、ゲオルグ・ディッカーの所論を例示的にあげておく。

カール・レンナーは、1928年の論文「戦後の社会主義政策の世界経済的基盤」⁵⁴⁾において、アメリカの「世界的金融資本」とそれによって「債務植民地」化されたヨーロッパといった世界経済の対抗図式から、つぎのように「組織された資本主義」をのべている。

アメリカにたいするヨーロッパの対抗手段は、「経済生活のアメリカ化」(合理化)とその条件としての大ヨーロッパ経済領域の創出である。この合理化は「国家によって組織された資本主義」によってのみ可能であり、われわれは経済の国家化、すなわち「資本主義を国家的に組織する時期」にすでにいたっている。

レンナーはかくて労働者階級の「社会主義的国家経済政策」として、「国家によって組織された資本主義」の強制的実現と資本家と労働者によるその共同経営化を唱えた。

オットー・ライヒターは、1928年の論文「組織された資本主義とその弁証法」⁵⁵⁾において、つぎのようにのべている。

組織された資本主義は、生産の資本主義的管理から共同経済的管理へ移行するぎりぎりの境界線にせまった、「過渡的」で「政治化された資本主義」——国家の経済介入の強化された資本主義——である。そして計画化と共同経済的管理化の傾向と資本家の組織の支配とのあいだに種々の弁証法的矛盾を生んでいる。たとえば、労働者階層級の経済民主主義(共同決定権)の要求と国家を支配しかつ国家の権力機能をかねそなえるにいたった資本家的大組織の権力要求との矛盾、生産の集積による経済過程の合理化と景気循環および恐慌の排除のこころみにもかかわらず、大トラストが過剰生産の傾向をかえって強くし、景気循環と恐慌を止揚できないといった矛盾、資本主義の国際的組織化傾向と高率保護関税との矛盾、云々。

オットー・ライヒターは、結局、組織された資本主義における上記のような弁証法的矛盾の激化から、階級闘争の尖鋭化と労働者階級による政治的権力掌握の展望をたてている。

ゲオルク・ディッカーは、1928年の論文「今日の資本主義」⁵⁶⁾において、生産力と生産関係の矛盾にかんするマルクスの所説を取りあげ、つぎのようにのべている。

マルクスが社会主義をもたらすと意識した矛盾は、じつは生産力と自由競争の資本主義の矛盾であり、第一次大戦後、資本主義が、あたらしい適応能力と柔軟性をもっていることが示された。すなわち組織された資本主義の到来がそれである。この組織された資本主義への発展は経済の組織化への移行を意味し、経済過程の計画的指導の萌芽を含んでいる。そのさい、資本主義はますます国家の支持と保護を追求せねばならず、民主国家では選挙民の意志に国家の経済介入の方向性を依存するようになる。

かくてディッカーは、民主国家における労働者階級の影響力の増大に社会主義運動の将来をみるのである。

以上の例示からも、「組織された資本主義」は、個々の論者のあいだで、さまざまに理解されていた——三人のなかではディッカーの所論が一番ヒルファディングに近い——ことがわかる。したがってより綿密な学説史的整理が要求されるといえよう。

- 41) R. Hilferding, (Anm. 38) S. 1~2.
- 42) Ebd.
- 43) Otto Bauer, Die Wirtschaftskrise in Österreich, Ihre Ursachen-ihre Heilung. Vortrag des Herrn Nationalrates Dr Otto Bauer auf der Hauptversammlung 1925 des Bundes der Industriearbeiter, Wien, 1925. S. 3.
- 44) R. Hilferding, (Anm. 34) S. 169~171.
- 45) R. Hilferding, (Anm. 40) S. 278~279.
- 46) R. Hilferding, Die Eigengesetzlichkeit der kapitalistischen Entwicklung, *Kapital and Kapitalismus*. hr. v. Bernhard Harms, 1931, S. 20.
- 47) a. a. O., S. 29.
- 48) W.アーベントロート『ドイツ社会民主党小史』広田司朗、山口和男訳、ミネルヴァ書房、1969. 183ページ。
- 49) R. Hilferding, (Anm. 40) S. 280~281.
- 50) R. Hilferding, (Anm. 39) S. 166.
- 51) a. a. O., S. 166~170.
- 52) エル・レオンチエフ『「組織された資本主義」と『経済民主主義』(ベ・ボリシ)ン「ブハーリン『転形期の経済学』批判」高尾正之助訳、叢文閣版、1930 付録) 129~155ページを参照。
- 53) 服部英太郎『ドイツ社会政策論史(上)』著作集 I, 未来社, 1967, 36~38ページを参照。
- 54) Karl Renner, Die wirtschaftlichen Grundlagen der sozialistischen Politik nach dem Kriege, in: Der Kampf, 21. Jg., 1928.
- 55) Otto Leichter, Der organisierte Kapitalismus und seine Dialektik, in: Der Kampf, 21. Jg., 1928.
- 56) Otto Leichter, Kiel und Linz, in: Der Kampf, 20. Jg., 1927, S. 308.
- 57) Georg Decker, Der Kapitalismus von heute, in: Die Gesellschaft, 5. Jg. Bd. 2, 1928.

2. 前述のごとく、ヒルファディングは、資本集中が今日「資本主義経済

の支配的法則として証明されている」と確認して、そこから資本主義の組織化と計画化をみちびきだした。だが、彼はあらゆる産業部門においてカルテルとトラストが成立すると考えたわけではない。とくに彼は、エルフルト綱領の予測に反して、「農業において集中法則は決して妥当しない」とさえいっている⁵⁸⁾のである。ヒルファディングのこの見解は、1924年のハイデルベルク党大会における農業綱領作成への要求と関連してのべられた。そしてそれは当時の社会民主主義のかなり支配的な見解であったようである。オーストロ・マルクス主義の代表的理論家のひとりであるオットー・パウアーは、小経営にたいする大経営の技術的優越性の問題を大経営による小経営の駆逐の問題と混同してはならないといい、経験は後者が幻想であり、小農経営と大経営が並存関係にあることを示しているとのべている⁵⁹⁾。

周知のように19世紀末に生じた農業綱領論争においては、中小農経営の根強い残存傾向を指摘し、農民保護政策の必要性を訴えたシェーランクやフォルマルの修正提案にたいして、中小農経営の没落の必然性を説き小農保護政策を否定するカウツキーの原則的見地が勝利した⁶⁰⁾。しかし相対的安定期には、カウツキーのこの見解は修正されるか否定されるにいたった。そして農業における経営の集中を否定するという共通認識にたつて、オーストリア社会党のウィーン農業綱領(1925年)とSPDキール農業綱領(1927年)が作成されたのである⁶¹⁾。

ヒルファディングは論文「農業問題への理論的評註」(1927年)などにおいて、農業における経営の集中法則の非妥当性とそれにたいするSPDの処方箋をつぎのようにのべる。

まずヒルファディングは、農業経営において集中法則が妥当しない事実を、農業における土地所有配分の特異性すなわち土地所有配分が工業のように技術的発明と経済法則の摂理によってなされるのではなく、征服・革命・国家の干渉—農業革命、農奴解放—によって遂行される点から説きおこしていく。農業ではかかる暴力的行為が重要な役割をはたし、経済的作用は、この暴力の諸結果をわずかに変更しうるにすぎない。したがって農業経営の集中の間

題は経営規模にもとづく技術的優越性のいかんからではなく、この土地所有配分の性格と結びついた農産物価格の形成の独自性から説明されなければならない。

自由競争の前提下では、工業において、長期的にみれば、最低生産費が生産物価格を決定する傾向がある。農業では事情がことなり限界生産物、すなわち需要に応じて生産されたものでもっとも不利な生産費のもとで製造された生産物が価格を決定する。そしてそこには、供給にたいする需要の超過という「基本傾向」があり、「土地収獲通減の法則」の作用から、価格の上昇傾向が絶えず生じている。とくに海外農業というアウトサイダーとの競争を克服してしまい、農業は自然のカルテルをなすものとなり、そこでは技術的改善を強要する競争の圧力が効果的に働かない。それゆえ近代の大経営とならんで文盲層の手にゆだねられた後進的伝統的な農業をいとなむ広範な小経営が残存しているのである。

かくてヒルファディングは、農業における資本集中の法則を否定し、農業が「組織された資本主義」の後進領域であることをとめる。それとともに、農業では小経営を克服して大規模経営に集中することの社会的政治的意義も失われたとして、そのかわりにつぎのような農業政策をしかけている。すなわち彼は国有化ではなく、①国家の意識的干渉による農業科学と農業技術のあらゆる成果の応用による農業生産性の向上、②農産物価格形成への社会的干渉によって生産の方向性を規定する穀物商業独占といった二つの要求を基本政策としてうちだす。これらの要求は農業にたいする国家の干渉を楨杆としたものである、結局ヒルファディングは、国家の意識的調整によって、農業を「組織された資本主義」に組みこもうとしたといえる。⁶²⁾

* SPD農業綱領は、上述の二つに内地植民政策を加え、合理化政策、内地植民政策、農産物価格支持政策の三つを基本的柱とした。ヒルファディングは、それらの政策によって、農村の文化・生活水準を引き上げ、その都市化をはかって農民の意識構造を改善し、農民の支持を得ようとした。しかし合理化運動は、資金・技術面からいって大・中経営をその担い手とし、小農層の没落を一面では促す作用をもっていた。結局、SPD農業綱領は、農民保護を謳いながら、都市

生活者の観点から打ちだされた食糧増産政策および人口政策としての性格をもっていたのであり、それが採択された翌年に始まる農業恐慌の深刻化のなかで農民を引きつける魅力を失ってゆくのである。⁶³⁾

さてヒルファディングが農業経済の集中法則を否定するのにもちだした農産物価格論は、つまるところ供給にたいする需要の超過という農業の「基本傾向」を土台にしているといつてよい。ヒルファディングのこの見解は、むしろ彼の地代論把握にも起因するのであるが、同時に当時のドイツ農業にかんする彼の事実認識と密接に結びついている。彼は相対的安定期のドイツ農業についてつぎのようにのべている。

「海外諸領域の編入から発した（農業の一引用者）価格抑圧は、すでに1896年くらい過ぎ去っている。戦争までは農産物の価格上昇の一時代であった。1921年から1924年までののはげしい農業恐慌もまた過ぎ去った。ロシアと東南ヨーロッパにおける農業革命は、この領域の輸出能力をとほうもなく、おそらくは長期的に減退させた。われわれは、農産物供給のおくれた、この増加が価格上昇に対応してのみなされる一時期に、工業生産の拡大に比して、農業生産の拡大が相対的にたちおくれた一時期のなかにある。⁶⁴⁾」

すなわち、ヒルファディングは、まず、1875年から95年までの長期にわたった戦前の農業恐慌が、ヨーロッパ主要資本主義国での高率農業関税の設定とアメリカでの工業拡大による内需拡大から生じた穀物輸出の停滞によって克服されたことを確認した。そしてこのアメリカの穀物輸出停滞が戦後もつらぬくと考えた。つぎに彼は戦後恐慌が克服されたとのべる。これについて1924年の論文「商業政策と農業恐慌に」よりつつ説明すると、彼は戦後の農業恐慌が、戦前のとはことなり、海外の安価な農産物の流入によってではなく——アメリカの穀物はもはや安いとはいえない——、購買力の一時的低下によるものと主張した。この購買力の低下は、戦後世界経済恐慌、インフレーションおよび為替相場の変動による混乱から生じたものである。しかし政治的安定さえとりもどせば、ふたたび好況が展望される。それとともに農産物への需要も拡大し、農産物価格と工業価格のこれまでの関係を逆転するだろう。⁶⁵⁾ ヒルファディングは、1924年当時のこの予測が、今や実現される

にいたったと考える。そして、東南ヨーロッパにおける農業革命が、大土地所有を小農に分配することによって生産性をいちじるしく低下させ、長期にわたって輸出能力を減退させるということから、ドイツ農業の活況傾向が永続的に続くといった見とおしをたてている。かかる見とおしから、ヒルファディングは、彼の農産物価格論を展開したといえる。

確かに1925年から1928年にかけてのドイツでは、農産物価格の一定の上昇がみられた。しかしこれはヒルファディングが考えたほどではなく、農業と工業の缺状価格差を根本的に解消するものでなかった。しかも皮肉なことにヒルファディングらが農業綱領を採用した翌年すでにドイツは世界農業の生産過剰傾向に巻きこまれ、農産物価格の崩落にみまわれたのである。そして世界農業恐慌が生ずるわけだがそれはヒルファディングの農産物価格論の基盤を根こそぎ奪い去った。小農を激減させ、中農経営を危機に追いやり、いちじるしく農民層分解を進行させた。⁶⁶⁾ SPDの農業綱領は、なんら農民を獲得する有効性を示しえなかった。現状に不満をおぼえた農民は、逆にナチスのもとに救済をもとめて結集することになるのである。かくてヒルファディングの「組織された資本主義」論の根本的欠陥は、農業についての見とおしの誤りに、ひとつの端的な表現を示しているといえよう。

58) R. Hilferding, (Anm. 40) S. 277. Theoretische Bemerkungen zur Agrarfrage, in: Die Gesellschaft, 4 Jg. Bd. 1, 1927, S. 428.

59) Otto Bauer, Zum Parteitag, in: Der Kampf, 18. Jg., 1925, S. 404~406.

60) 浅井啓吾「ドイツ社会民主党研究序説(下)——世紀転換期における正統主義と修正主義をめぐる——」(経済系59. 60集, 1964), 山口和男「農業綱領をめぐる論争」(『ドイツ社会思想史研究』ミネルヴァ書房, 1974, 第2章)を参照。

61) この邦訳は、社会経済研究所『農業政策綱領』(註3)の付録にある。

62) R. Hilferding, Theoretische Bemerkungen zur Agrarfrage (Anm. 58) S. 411~432.

63) 豊永泰子「ドイツ社会民主党と農業綱領問題——1918年~1927年——」(大野英二・住谷一彦・諸田実編『ドイツ資本主義の史的構造』有斐閣, 1972, 二), 原田淳「ドイツ社会民主党とキール農業綱領」(九大・社会科学論集12, 1972, 3)を参照。

- 64) R. Hilferding, (Anm. 62) S. 429.
- 65) R. Hilferding, Handelspolitik und Agrarkrise, in : Die Gesellschaft, 1. Jg. Bd. 1, 1924, S. 115~118.
- 66) a. a. O., S. 117.
- 67) 原田溥「ドイツ資本主義の農業問題」(九大経済学部40周年記念論文集, 1967), 谷口信和「ワイマール・ナチス期におけるドイツ農民層分解の特質」(商学論集45(1)1976. 7), 渡辺寛「世界農業問題」(『講座・帝国主義の研究—2 世界経済』青木書店, 1975, 第3章)を参照。

〈未完〉